

「造形遊びの展示とワークショップ」

On Exhibitions and Workshops of Zōkei-asobi (Art Play)

弘前大学 蝦名敦子

<概要>

本稿は、筆者が2016年に行った二つの造形遊びの展覧会・ワークショップについて振り返り、その内容と成果、今後の課題について考察したものである。

ここで言う「造形遊び」とは、本来小学校図画工作科の中で行われる教育内容であり、絵や立体、工作と並んで位置づけられているものである。造形遊びは活動が主体である。そこで展覧会・ワークショップでは、会場に造形物を幾つかのコーナーに分けてセットし、自由にどこからでも活動できるような場を設定した。展覧会に足を運ばれる方々に実際に手を動かしてもらい、会場の空間を変えることを楽しんでもらいたいと企画した。インタラクティブアートが行われている今日、鑑賞者参加型の展覧会はよく見られるようになった。しかし、本展覧会は参加者が活動しながら自らが造形空間を作っていく。すなわち、展示会場が制作の場となるのであり、学校で実施される「造形遊び」の場を用意したことになる。ここからどのような造形的空間ができていくのか、「みんなで造形遊び」展（弘前市百石町展示館）を、8月1～3日まで開催した。

また、この展覧会後に依頼を受け、次の展覧会へとつながった。同年12月3～4日に行われた「キッズ・アート Viewing +創」展（弘前市ヒロロ）である。これは、特別支援学校などに通う児童生徒の作品展で、その一角において同様の展示とワークショップを行った。こうした場所や対象者を変えることで、展覧会としての場の設定や、集う子ども達によっても活動に違いが見られた。

いずれも「材料」と「場所」を基に造形遊びをする活動であったが、「材料」に関しては紙を丸めて棒状にする段階で、幼児、特別支援学校の一部の子ども達には難しさがあった。おおよそ小学1年生から紙を丸めて棒状にし、両端をリングにして繋げて行く活動が全員できている。彼らの活動は、自由な指や身体の動きに支えられており、こうした活動は特別支援学校高等部の生徒においても、体が不自由な場合は難しい面が見られた。場所（の特徴）に関わりながら自由な造形をしていくことは、さらに知的な活動として捉えられる。

幅広い子どもの実践を見ることができたが、特別支援の児童生徒には材料の異なった特徴づけが必要になる。「みんなで造形遊び」展では、「動き」や「光」の要素を取り入れた展開が、「キッズ・アート Viewing +創」展では、身体に不自由を抱える子ども達の活動を許容する造形物の「堅牢性」が課題となる。いずれにおいても子ども達は、造形遊びを通して体一杯造形物に触れながら活動した。今後は造形遊びを通してできる形態の立体や工作の要素と、立体や工作の活動による造形物の違いについてさらに明らかにする。また造形遊びの特質は、場所（場所の特徴）が関わる点にあること、すなわち、造形的空間を創出する点に顕著に見られる。（1156字）